

ヤンゴン素描 No.22

山形洋一

ハンターワディー駅 英国風チャペルとラーマ寺



列車でチミンダイン駅から北へ向かうとほどなく、左側車窓にひろく展開していた線路が徐々に近寄り、かわりに輻輳の管が増えてゆく。やがて線路はただ一对の複線にもどり、10本ほどの輻輳管はひとまとめに右へ折れ、バホ通り角の転轍小屋の床下に吸い込まれる。

鉄道の両側には舗装道路が並走する。西を走るのはアロン通り駅から北上してきたローワー・チミンダイン道路で、チミンダイン河岸からの陸揚げを待つて幌をかけた大型のトラックが何台も止まっている。白タイルに青屋根の有料公衆便所が複数完備しているのは、主として運転手のためと思われる。

東を走るのはバホ道路。名前は「中央道路」と立派だが、住居や店舗のようすはどこかしらダサく、旧称「シャン道路」が似つかわしい。

左右を見比べているうちに、列車は速度を落とす。ハンターワディー駅だ。

駅名 (Han Thar Waddy) は、モン族の都バゴ (Bago、ペグーPegu) の古称である。伝説によれば、かつて大洪水で地面がすべて水没したとき、バゴの一角だけが水面から頭を出し、そこに一つがいのハンサ鳥が降り立ち、国を興したという。

サンスクリット語の「ハンサ」はガチョウの一種とされ、梵天 (ブラフマー神) の乗り物である。漢訳では「鷲王」、モン語でハンター、ビルマ語でヒンダーとなる。東京の大倉集古館にある梵天座像を支えているのは四羽の写実的なガチョウだが、ミャンマーの図像ではとさかと尾羽が火炎のように立ち上がる。

バゴの町でよく見かける二羽のハンサ鳥の図柄は、鷲王国「ハンターワディー」の紋章である。その名は英領時代、現ヤンゴン管区の南部を占める県 (ディストリクト) 名にも用いられ、それにちなんでこの駅や、駅前を通る道路の名にも当てられた。

だが名前のめでたさとは裏腹に、この駅の歴史は物悲しい。このあたりがまだランゲーンの町はずれだった 19 世紀末、墓地と、ハンセン病患者の「保養所 (Asylum)」が設けられた。その後町の膨張につれて墓地は北へと移動し、「保養所」はハンセン病患者の減少にともなってか、「国立整形外科病院」と名前を変えた。

ハンターワディー通りを歩くと、今でも 1901 年建設のチャペルが立っている。勾配の大きな屋根を暗灰色のスレートで葺き、窓ガラスを鉛の枠で縁取った、イギリス田園趣味の素敵な建物だが、ビルマ各地から無理やり連れてこられた患者たちの目には、背筋が寒くなるほど無機質に見えたことだろう。広い構内のどこかには、白亜のパゴダや極彩色のヒンドゥー寺院が建っていたのかもしれないが、今は見られない。

ハンターワディー道路を北西にたどるとライン川の岸に出る。川を下って運ばれてきた木材を加工するための製材所や、穀倉地帯エイヤーワディー産の米をあつかう精米所が岸に立ち並ぶ。鉄道の引込み線を取り払った跡地はネイツバン (Neik Ban、涅槃) 通りと呼ばれ、チミンダイン^{カンナー} 堤 通りと交差する角に南インド風極彩色のヒンドゥー寺院が建っている。入り口には「ラーマ寺」と、英語、ビルマ語、ヒンディー語、タミル語で書かれている。

中に入るとなるほど、壁にラーマヤナの絵物語が描かれ、一角にはブッダの座像も置かれている。ヒンドゥー教徒にとってゴータマ・ブッダ (釈迦) も、ラーマ、クリシュナに次いでビシュヌ神がこの世に姿をみせた化身 (アヴァタール) の一つだとされている。ラーマ寺は釈迦にとっていわば本家筋に相当する。

ヒンドゥー寺院の外観はごてごてしているが、基本構造はいたって単純で、福建・沖縄の亀墓の上に石をどんどん積み上げたと思えばよい。お参りはすなわち胎内くぐりなのだ。どんづまりの四角い空間はその名もガルバグリハ（子宮）と呼ばれている。真ん中にリング（陽根）がよつきりと立ち、水で濡れて黒光りする先っぽに、真っ赤な花などが捧げられている。その造形は原始的だ。

だがハンターワディーのラーマ寺はちょっと様子が異なり、リングは内院の隅に、シバ座像は境内のはずれに置かれ、人気の高いドゥルガー神妃の像も見当たらない。シバ・ドゥルガー系の荒ぶるエネルギーを極力遠ざけ、ビシュヌ的調和世界を強調している、との印象を受ける。

寺院内にある銅版の碑文によれば、発起人の大半がインド南東部アーンドラ・プラデーシュの出身者で、ヤンゴン市南部の商業地区でベアリングやバッテリーなど自動車部品を商う人たちが多く寄進している。インド、シンガポールからの大口寄付も記録されている。

アーンドラ州はベンガル湾を挟んでヤンゴンのほぼ対岸にある。植民地時代たびかさなる飢饉に見舞われ、多くの窮民が職を求めてマドラス港（現タミルナードゥ州の首都・チェンナイ）からビルマへと流れた。「東洋の真珠」と呼ばれた国際都市ラングーンの底辺を支えたのは、これら苦力（クーリー）と呼ばれる低賃金労働者だった。

世界大恐慌のあった1930年、インド系の港湾労働者がストライキを起こし、その穴を埋めるためにビルマ人が臨時に雇われたことがある。やがてストは解決してインド人が港湾に戻ると、臨時採用のビルマ人労務者は職を解かれた。怒った彼らは逆恨みの矛先をインド系住民に向け、虐殺した。これが引き金となり、ついには独立運動に発展するのだが、民族自立のエネルギーが真の敵に向かわず手近な犠牲者を求める悲劇は、現代でも繰り返されている。

アーンドラ系移住者によってチミンダイン港近くに建てられたラーマ寺には、緬印対立の犠牲者を悼み、民族融和を願う気持ちが込められていると思うのだが、デリケートな話なのでまだ確かめえないでいる。

（了）